

## 09

福島県  
南相馬市

## 特定非営利活動法人あさがお

## 障がい者に安心して暮らせる場所と生きる喜びを

原発事故が起きたとき、南相馬市から避難した精神障がい者らは行く先々で差別を受け、つらい思いをした。特定非営利活動法人あさがおは震災前からグループホームや事業所を運営していたが、さらに活動を広げ、障がい者が安心して暮らす場所と仕事を提供し続けている。

## 取組のPOINT

ヒト

福祉への情熱

着眼点

障がい者に居場所と仕事を

連携・  
協働

思いが人を呼ぶ

持続性

安定した資金調達を

## DATA

取組  
主体特定非営利活動法人  
あさがお取組  
内容

障がい者支援

人物  
紹介理事長  
西 みよ子 (にし みよこ)

福島県南相馬市出身。専門学校を卒業後、結婚し夫とともに家業に入る。子育てが一段落した後、2002年に小規模作業所「あさがお」設立。04年に特定非営利活動法人あさがおを創設し理事長に就任。就労継続支援B型事業所、グループホームなどを運営する。

ヒト

## 福祉への情熱

## 福祉への思いが芽生えた高校時代

50歳で障がい者福祉の団体を立ち上げた西みよ子さんが、思いの根っこは高校時代にさかのぼる。福島県立原町高在学中、教室の前の席にいた生徒が足に障がいがあった。西さんはどこへ行くにも一緒に行動し、手助けをするうちに、障がい者の困りごとや取り巻く環境に関心を深めた。校内でボランティアサークル「竹馬の会」を立ち上げ、資源回収で得たお金を寄付したり、施設訪問をしたり熱心に活動を行った。卒業後は保育士専門学校へ進学し、結婚、子育て、嫁ぎ先の家業、と忙しい日々を送ったが、「いつか福祉の仕事をするんだ」という思いはずっと胸の奥に燃やし続けていた。

## 50歳から福祉作業所を設立

子どもが自立し、手が離れたのは50歳。目標を持っていた西さんは、それまでの間に鹿島町(当時)が主催したヨーロッパ研修に参加してスウェーデンなどで福祉の先進事例を学んだり、一緒に働いてくれそうな人に声を掛けたりして、準備を進めていた。「今だ」と心を決め、2002年に小規模作業所「あさがお」を設立。精神、身体、知的の障がいを持つ人が、大豆栽培、味噌づくり、軽作業、資源回収などの作業を行った。04年に法人格を取得して特定非営利活動法人あさがお設立、08年に地域活動支援センター「いっぽいっぽ あさがお」を立ち上げ活動拠点を増やした。

09年、就労継続支援B型事業所(※)「きぼうのあさがお」を創設、障がい者が賃金を受け取りながら働く場を作るという念願を叶えた。この頃には作業内容も幅広くなり、弁当製造・配達、豆腐作り、お菓子作り、メール便配達なども行っていた。並行してグループホーム「いやしの家」も2002年、07年、10年に合計7ヶ所に開所し、精神障がい者がサポートを受けながら共同で生活する環境を提供していた。11年、東日本震災発生。事業所は事故を起こした福島第一原発から31キロ地点で避難指示区域の外側だったが、通常の運営が続けられる状況ではなかった。西さんらは、避難することを決める。

※ 就労継続支援B型事業所：障がいを持つ人に働く機会を提供し就労に必要な訓練などを行う施設で、生産活動に応じて工賃を支給する。

## 着眼点 障がい者に居場所と仕事を

### 避難先で差別を受ける

精神障がいを持つグループホーム入所者のうち家族の元に帰せる人は帰し、そうではない人は自分たちが面倒を見ながら一緒に避難することを決断した西さん。2011年3月17日、入所者と支援者合わせて26人が6台の車に分乗しとにかく西へ向かった。最初に頼ったのは伊達市梁川の避難所だった。しかし「自主避難」扱いの一行は食事や水が満度に提供されないうえ、「放射線の塊みたいに思われて」留まれるように思えなかったという。1泊した後、さらに西を目指し、山形県上山市へ。先に避難していた親戚が市役所に向けあってくれ、ある避難所に入ることができた。しかしここでも食事やオムツ等、生きるために最低限必要なものの提供を受けることができず、さらに精神障がい者への無理解から心ない言葉を連日浴びせられる。西さんは「ここは彼らがいるべき場所ではない」と帰還を決意、2週間後に地元へ戻った。

### グループホームを次々に開所

南相馬へ戻った入所者や自分たちの生活をどうにかしなければならぬ。もともと「きぼうのあさがお」の豆腐は評判が良かったが、上質な青ばた豆を原料とするため価格が高い。「地元では売れないと思って」、西さんは東京へ向かう。避難者向けに無料開放していたホテルに滞在し、事業所から送られてくる豆腐をどんどん売った。夜の時間も無駄にせず、専門学校で夜間部に通って2012年、精神保健福祉士の資格を取った。とにかく必死だった。

資格を取って地元に戻ると、グループホームの新設に奔走する。すでに3カ所を運営しているが足りないと考えたのは、放射能への差別、障がいへの差別と、つらい思いの連続だった避難生活の記憶からだ。他の精神障がい者が大変なストレ

スを強いられていることは容易に想像できた。さらに福島県から情報を得た、避難した精神障がい者のうち半数がその後死亡したという事実には愕然とした。

実際、困難に直面している障がい者は多く、西さんらがグループホームを作ると入所者は次々に行政から紹介された。以前は地域の病院と連携し、入所者の体調が悪くなればすぐに診てもらえたが、震災後どの病院もスタッフが避難して休診していたため苦労した。「具合の悪い人を車に乗せたまま途方に暮れたことも、何回もあった」と振り返る。それでも、西さんらは踏ん張り、震災後2011年～2017年にかけて4カ所のグループホームを開所した。

## 連携・協働 思いが人を呼ぶ

### 活動の広がりとともに連携先も多彩に

震災後、年数が経つにつれて資材や建設費は高騰した。グループホームの建設には一部、福島県の社会福祉施設等（自



当初からの立ち上げスタッフ







レクリエーション運動会

立支援関連施設) 施設整備費補助金を活用した。資金繰りの苦しいときは、給食用に地元の農家が野菜を提供してくれることもあったという。

2015年に生活介護・自立訓練を行う多機能事業所と相談支援事業所「ともに」を開設し、さらに活動のフィールドを広げた。視覚障がい者の支援団体や学校、盲導犬協会等との協働も増えている。また地元の中学、高校等と連携し障がい者への理解を深めるワークショップを行うこともある。2020年には児童発達支援・放課後等デイサービス「はぐくみ・あさがお」を開設し子どもへの支援も開始した。



「きぼうのあさがお」での作業風景

## 思いの強さに引き寄せられる協力者

思いのままに突き進む西さんの周囲には協力者が集まる。団体の立ち上げ時も強力なスタッフが揃ったが、その後も、パティシエが活動に参加しお菓子の製造販売ができるようになったり、経理事務の経験者や元行政職員など専門技能や知識を備えた人材が加わったりと、仲間を増やしなが法人は成長を続けている。

訓練生の仕事を増やそうと情報を集め、市の委託による清掃業務だけでなく、ヤマト運輸のメール便配達を請け負ったり、地元企業の委託を受けたりする。ヤマト福祉財団からは助言やサポートも受ける。震災直後、東京で豆腐や大豆製品、野菜を販売するにあたっては、スマート農業用の開発などを手掛ける「銀座農園」(東京) がバックアップした。

## 持続性 安定した資金調達を

### よりよい作業環境を整えたい

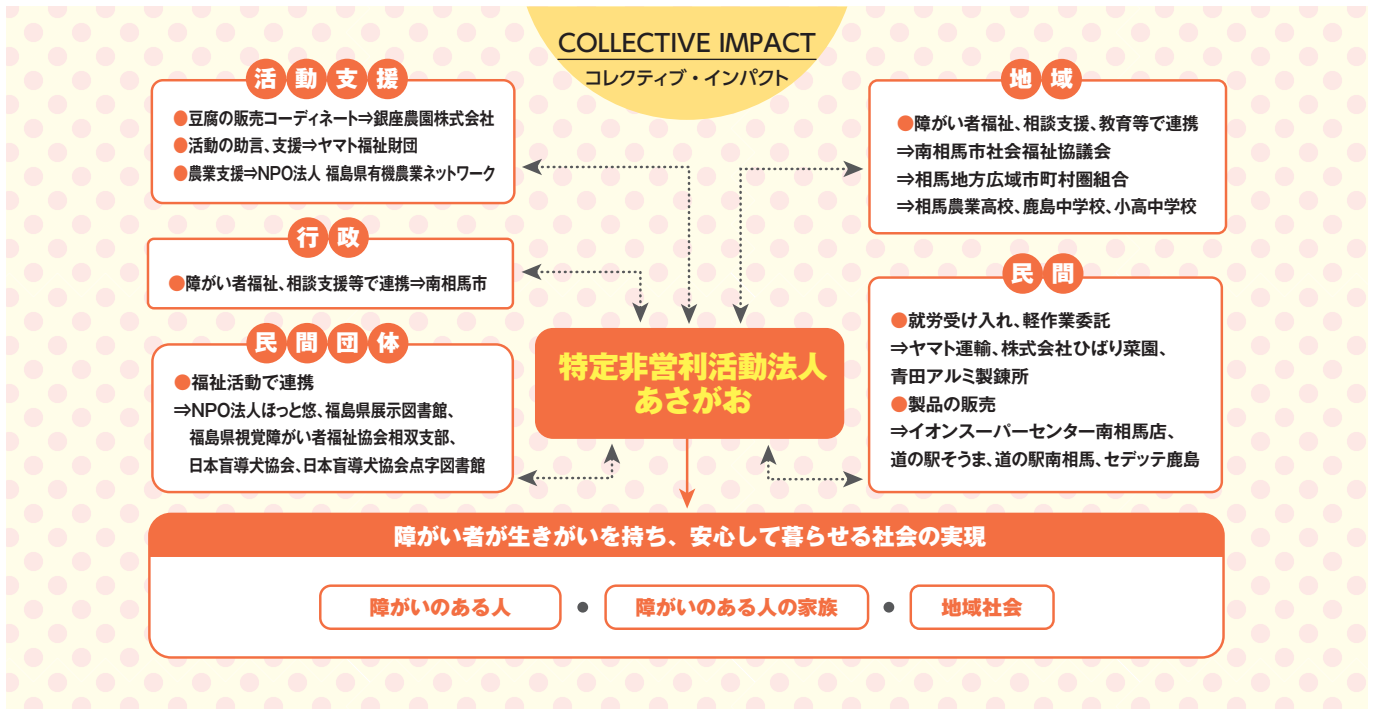
事業所では青大豆の中でも高級とされる青ばた豆を有機栽培・農薬不使用で生産しており、加工品も種類豊富に製造する。「おから」を出さない製造法が特徴で、食物繊維が豊富で栄養価も高いことで人気だ。他にも弁当やスイーツなどさまざまな加工品を作っている。長年の地道な活動が実を結び、「あさがお」は地域にしっかり根付いた。現在、福島県で最も多い賃金(月額平均4万円)を実現していることは、訓練生にとっても職員にとっても誇りである。

製造品目が増え作業所が手狭になってきており、用地取得と新施設の建設を目指している。「特に精神障がい者には、特性に応じた環境が必要。落ち着いて生き生きと作業に取り組める施設が悲願です」と西さん。目標は活動の持続にとどまらず、より良い環境をより多くの障がい者に提供することだ。

### 障がいがあっても人生は開ける

今後の活動を発展させるためには安定した資金調達が不可欠だ。いつも運営は苦しく特効薬はないが、新しい名物商品を作りたいと考えている。まだ試作段階で、実現するには設備投資も必要だが、夢を語るスタッフの皆さんの表情は明るい。

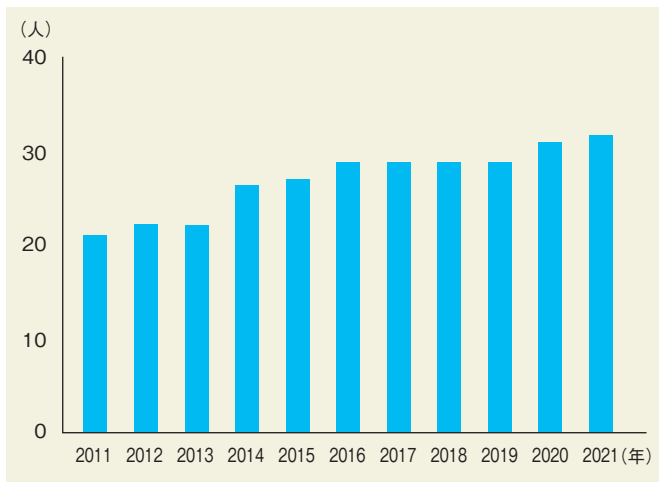
活動を始めた頃、社会は今よりもっと障がい者への理解度が低かった。特に精神障がい者は「いない存在」「危険な存在」とみなされた。「簡単な解決法はありません。コツコツ居場所と住む場所を作り、地域とつながる機会を作っていくしかない」と西さん。その活動は確実に成果を上げている。



障がい者にとって働くことのハードルは高く、年金や生活保護で暮らすという人もいます。けれどもすべての人が必要とされて生き、収入を得て自分が望む生活を実現してほしい。自立して暮らすためには、障がい年金の他に収入として月額7～8万円が必要だから、平均4万円ではまだ少ないという。

今回の表彰は思いがけない出来事だったという。「2021年は活動を始めて20年の節目。記念のご褒美をいただいたよううれしかった」と西さん。「障がいがあっても人生は開ける。生きる喜びをともに味わいたい。だからまだまだ走ります」と話した。

■ 「いやしの家」の入所者数推移



就労継続支援B型事業所「きぼうのあさがお」の前で



製造販売されているお菓子

青ばた豆で作られた味噌



**本事業例の問い合わせ先**

**特定非営利活動法人あさがお**

福島県南相馬市鹿島区鹿島字上沼田120  
E-mail : info-asagao@olive.plala.or.jp  
HP : <http://www8.plala.or.jp/asagao/>

障がい者の支援施設、多機能事業所などを多数運営。社会復帰・社会参加に関する事業を行いながら、障がい者が安心して暮らせる環境を提供している。